



誹諧雪之集 下

ふ踏雪のふふふふふ

餅子

雪乃枝

假初降出ひ雪の中之哉
此へ申く間も初雪は染る
降音乃金中にほかり刺の雪
揚貴戸の花より下りあり雪の

葵太
鳥明
完来
秋瓜

遠ひくはつたの雪

止絃

花六
百童
呉詠
木鼠
斗南
里翠
露船
仙里
ほくろくさうたがくはれお危

花六
百童
呉詠
木鼠
斗南
里翠
露船
仙里

初雪也垣電飛山塗是也

明山

雪の夢也障子を明りも

濟山

青空乃水清る山也雪の雪

如春

雪の雪は山を思ふは雪

剪雪

多く雪のことも雪は雪

暮原

山原は雪の人の雪

都久裳

夕烟り雪は野を小里あり

荒藪崎

鳥秦

雪は日也雪ひを橋の流り初

鴻巣

柵儿

昔乃雪心細くも詠の形

越後
六日町

交路

雪もほくも風定くぬ雪中

尚古

りもく雪深の山家うも

仙葩

雪の目如鐘も届く日の高

松居

雪も中くふれ方の星乃光

文里

初雪は厚根無くゆふ立

女此

さ遠く強じむ雪の深雪

路青

積ふもながく雪降日暮

風絮

とく雪も枯れゆく表去り

慮呂

関山

初雪あゆみ乃ちく雪標程

周和

雪も入る葉持たは乃雪

一英

雪もかき取らば雪の

溪雪

雪は日如降とかりを流池の面
おふまを身なつてくまの雪
如杏
竹扇

降る雪の如引哉乃人
塩沢
牧水

雪降るくまの如雪くまの
雪ふる小瀬音を流池の雪
扇翅
亀周

初雪の如く雪の如く雪の如く
小出島
東風

以倦く雪乃くまの雪の如く
雪は如く戸の如く裏を拂ふ
棠舟
桃厄

初雪の如く雪の如く雪の如く
堀之内
巨鳥
儿熊
徐々

初雪や雪ふふ舞う見ゆれば
待宵や雪まよひかへし思ひ雪

小千谷

吐涼
柯風

物も雪の上はなれぬ夜の雪

長園

六蛙

雪よりの雪ふふにふも雪

北語

秋の雪ふふも雪ふふも雪

里秋

赫くと雪ふふ雪の山

柏崎

秋兔

鴨乃雪の雪ふふ雪

二英

足音の雪ふふ雪の雪

里桐

雪ふふ雪の雪ふふ雪

梅雅

雪ふふ雪の雪ふふ雪

荒井

鷺大

雪ふふ雪の雪ふふ雪

芦洲

初雪也檜原の雪入りわらわら
ほ初雪も茶話ふもつれぬ雪

安塚 浦本

鳳羽 漁日

雪原一子もあきらむおの鶴

高田

宴池

あはれもあはれもあはれもあはれも

素琴

ひ人のほふもあはれもあはれも

竹茂

あはれもあはれもあはれもあはれも

素菊

汝越の松を志しけり雪見哉

真澄

枯芦やもあはれもあはれもあはれも

泰亀

あはれもあはれもあはれもあはれも

斗南

五智

雪はあはれもあはれもあはれもあはれも

水澤

吟志

あはれもあはれもあはれもあはれも

湖北

雪晴し門の嵐乃以候哉

可有

馬場

し人乃あつらん夜の雪

車因

初雪もあつらん雪は夕哉

芦角

安養寺

雪満ち窓をのぼる月をきか

露玉

松一本目當に歩む雪らん哉

安糸

水ももろく雪は降候哉

柗只

雪はあつらん夕間も

山谷

芦川

はくはく白くあつらん雪

右岡

初雪のあつらん雪は雪

朝雨

家菴は雪のあつらん雪

僧

石羊

障子もあつらん雪は雪

仙田

嗽石

初雪や釣瓶もあつらん雪

上野

山川

家毎も雪らん積らん雪

露竹

わらうと降雪ふゆのゆりうも

中条

柗宇

夕雪も雪と後くも路初れ

柗之

峯の雪夕のれりるるてり哉

芦喙

古雪のこもるらに雪の降る

市山

と野の雪ゆるりてり子供哉

下条

亀方

冬三月折く雪け蒼尾の如

大井平

起北

はくくもる果ぬ雪乃山路哉

寺石

芦秀

日よよとの雪らる松乃ちり哉

宮ノ原

左来

静かなる雪乃山家哉

湖海

白雪也月尔伴尔窓乃之落
十日町
 雪乃朝若初ら啼起しむる子
 幸運也灯字の一言此雪
 物に法也あらしぬく積る雪
 わらくと雪此絶るもあま
 山也雪のふく積る山
 維石
 百朋
 枝白
 二潮
 大儿
 山尾

初雪乃泥中降入る車る
 降満る雪に興あはれり共
 外の葉も授かりんる雪
 夕水
 竹師
 素睦

明鳥也中まき一窓の雪
 黄昏也雪野寺はるる
 桃路
 治風

雪の如く雪尔一日雪の如く
雨を以て日乃る寒く雪の山
心ゆく深く流る如く雪の山
亦く雪を以て日乃る山路共
柱もろく如く雪の山路共
晴れゆく雪乃る山路共
山里の雪降る如く糠俵

六明
仙魯
李山
魚淵
三嘗
山甫
霞雪

家系を承くむ如く雪の如く
夕晴る如く雪の如く
窓を以て雪の如く
山乃る如く雪の如く
目付おろく如く雪の如く
名乃雪を以て雪の如く

居樂
渭北
北里
二扇
臥缸
徐翠

雪降也 暮ら 乃 丘 田 菜 木 山

宋魚

雪降也 暮ら 乃 丘 田 菜 木 山

自好

雪の口 湖 水 を 舟 の 旅 け び

英之

源 名 一 丈 松 の 心 源 雪 哉

荷風

雁 ね ね ね ね ね ね 初 雪 降 ぬ 哉

松雨

遠 乃 雪 物 け け け 月 の 夜 不

野紅

雪 け け け け け け け け け け け

志川

山 里 の 雪 蒼 蒼 乃 降 け け け

蘭入

雪 降 ぬ 哉 先 亦 け け 寒 哉

燐石

片 山 の 雪 け け け け け け け

榴石

月 山 一 雪 木 妙 の 美 け 哉

兔園

降 初 雪 け け 雪 の 卯 け 哉

斗文

風流く雪降初〜おゆらあ
心りや日の〜雪は山
と〜雪門ふ清歌み物〜

二松
東水
蘭逕

花尔らあ〜月ひら〜あ中乃
か〜終場や〜〜起あ〜のた〜英
時〜み〜あ日れ心〜も風す
〜あ〜終〜あ〜

雪は山
はむ者江馬乃房家門口
洞〜き〜並〜た〜電尔湯の沸
渡橋を〜〜〜橋の本地挽
撥〜月〜氣〜山も〜あ

山之
樗良
桃路
宋魚
枝白

昼のわじりたる静寂に
供福乃依に翌れ小春侍
数もさしめ酒盃のち
志し初めを清出の雨れる
麻細糸く蝶のかき流し
糸もあまを昔まのし珠もも
くね洞乃床のまゝく
月啼く若は屋のほもせめ

延年 霞雪 二潮 大几 車因 六明 潮路

らび甲おもひな春慶の小社
武成強く鏡の上乃ね風
六十くりに肉の若ぬま
つるいふ柳たふさ中草の毛
野の雪を在り雪の毛とし
いろし児のいそひ乃乳母連々
日々油うく誓ふるのこ
羅也風のまをたぬひくも

雪 魚 白 因 年 几 雪

硯のあしはのま〜あまは
あゝのうらみよは鳥の舞の舞
はあゝの月をらばはあゝの
あゝのうらみよは鳥の舞の舞
はあゝの月をらばはあゝの
あゝのうらみよは鳥の舞の舞
はあゝの月をらばはあゝの
あゝのうらみよは鳥の舞の舞

明路魚白潮儿因之

鏡の奥儀を亮ら〜をり
毎もや〜丘中湖あのを
遊ひ乃はたあを遊〜
清きよ〜あを遊〜
あゝのうらみよは鳥の舞の舞
はあゝの月をらばはあゝの
あゝのうらみよは鳥の舞の舞
はあゝの月をらばはあゝの
あゝのうらみよは鳥の舞の舞

年明白因儿潮雪

四季

山之

村名遠雪車臨之...
久...
嶽...
國...

天明八年戊申春

夫和歌者託其根於地墜發
華於詞林者也感鬼神化凡倫
莫近於和詞詳於古今和歌集
之序也誹諧者和歌出源也其
技雖小至於其所長或造徹於
單辭或徵巧於隻歌使人短詠
而躍然蓋體裁雖殊言志述懷

固與詩詔无異凡及至佳句其
曲彊高其和弥寡然則於誹諧
者流謂出陽春白雪亦宜乎
雖然山君於此集也豈比之陽
春白雪出調乎聊復操土風而
已西方同嗅之土景響相應莫
不投言者方今以諧鳴世者

交臂於一堂出上不亦樂厚
其曲彌界其和弥衆雅尚鳳
寧無一二可稱者彊出弥新使
人長思而未罄則復稱出滑稽
智囊亦宜矣

魚郡關在植題壁





